はじめに

「ありがとう」
　りっぴさんには感謝の気持ちしかありませんでした。
　認知症のお年寄りが暮らす「グレイス有玉」のセラピー・ドッグとして、私たちの尊い家族として、この日まで頑張ってくれたりっぴさん。彼女のあたまにそっと手をあてると、閉じかけた瞼がかすかに開きました。
　少しでも楽にさせてあげたい。
　その思いで、私の自宅へ連れて行きました。
　彼女の大好きな畳の上にそっと横たえると、呼吸でやわらかなお腹がゆっくりと波打っています。
「もう頑張らなくていいんだよ」
　安らかに逝かせてあげたい――。
　それだけを祈りました。
　意識が薄れていく中、りっぴさんが必死に私に目を合わせようとしてくれるのがわかります。
「みんなが待っているホームに帰らなくちゃ……。仕事に戻らなくちゃ」
　　りっぴさんの瞳が言っているように感じました。
　　でも……、呼吸は少しずつ力を失っていきます。
「りっぴ！」
　たまらず声をかけると、苦しそうだった呼吸が穏やかになっていきました。
「りっぴ！」
　頭の中に、彼女と過ごした十年に起きた数々の出来事がよみがえり、私はあふれる涙を抑えることができません。
「ありがとうね……」
　もう一度、お礼を言いました。「ありがとう」の言葉しか口にすることはできなかった。それ以外何も言えなかった。
　彼女は安心したのかもしれません。
　再び閉じかけた瞼の奥で、少しずつ、少しずつ、瞳が光を失っていきます。
　やがて、かすかだった鼓動の音が完全になくなりました。

　二〇一六年八月――。りっぴさんは静かにこの世を去りました。
　りっぴさんが確かに生きていたあかしである、ぬくもりだけが、私のてのひらに残っていました。

　この本は、二〇〇六年十一月、浜松にあるグレイス有玉にやってきた雌のラブラドール・レトリーバーの物語です。

“彼女”の名前はりっぴさん。私たちのホームでは、敬意と愛情をこめて“さん”をつけて呼んでいました。
りっぴさんは、みんなのために生きてくれました。
年齢を重ねて、認知症になったお年寄り、ホームのスタッフたち、そして私にも、十年にわたって、愛と、優しさと、勇気を分けてくれました。
命の尊さや懸命に生きることの大切さを教えてくれました。

社会福祉や医療の現場でアニマルセラピーが実践されるようになって久しくたちます。動物とのふれあいの中で人が心の健康を取り戻し、ストレスが緩和され、穏やかさを取り戻す癒しの効果が期待されているのです。
今は日本中の施設で一万匹を超えるセラピー・ドッグが働いていると聞きます。彼らの命によって、たくさんの人の心が救われているのです。

犬や猫は人間のペットとして飼われるだけの存在ではありません。
彼らには感情があります。
家族として一緒に暮らすことによって愛情が育まれ、いたわりの心を持ち、私たちに勇気や生きる力を分けてくれます。
りっぴさん存在によって、私たちは教えられました。
その事実を今よりももっともっと多くの人にわかっていただきたい。
犬たちの力をかりて、もっともっと多くのお年寄りが、人生の最後の季節を幸せに過ごしていただきたい。
こうした思いをこめて、私は本をつづりました。りっぴさんと過ごした年月を記したいと思いました。
彼女は、もうこの世にはいません。
でも、りっぴさんがいたからこそ、グレイス有玉は、より温かく、より優しさのあるケアを行えるようになりました。

りっぴさん、ありがとう——。

加藤惠美子